

看護学実習における臨床指導者の役割に関する研究

たかつか ゆかり*・ながい ゆみこ**・やまかわ まさのぶ**
高塚 由香里*・永井 由美子**・山川 正信**

*ハートランドしぎさん看護専門学校・健康科学専攻（修了）・**健康生活科学講座

(平成26年3月31日 受付)

本研究は、看護学実習における臨床指導者のロールモデル行動を評価し、それに影響を及ぼす要因を探索するとともに、高いロールモデル行動得点を示す臨床指導者の特性を明確にし、役割改善の基礎資料を得ることを目的とした。看護学生の実習を受け入れている病院で、実習指導に携わっている臨床指導者237名に調査票を配布し、209名から回答（回答率88.1%）を得た。そのうちロールモデル行動尺度に1項目でも欠損のあった15名を除く194名（有効回答率81.8%）を今回の分析対象とした。

看護学実習における臨床指導者のロールモデル行動得点の特徴が、人としての在り方や看護実践能力の側面において高く、研究活動など職業の発展を目指す行動において低い特徴を示した。また、臨床指導者の特性との関連をみると、勤務形態において日勤のみの者が夜勤をしている者よりも得点が高く、実習の全期間を通して指導に携わった経験のある者が部分的な指導の経験のみの者よりも高い得点を示した。これより、看護学実習受け入れ中は臨床指導者を日勤帯での勤務とし、部分的な指導ではなく、実習の全期間を通して学生に関わることができる体制作りが望まれることが示唆された。

キーワード：看護学実習、臨床指導者、ロールモデル行動

I はじめに

看護学実習は、学内での講義や演習とは異なる特徴があり、臨床の場において展開される授業である。また看護学実習は、看護学生が学内で学んださまざまな知識を、実際の現場での体験を通して統合し、看護実践力の土台を作っていくために最も重要で貴重な学習の機会である。

看護学実習の中で学生は看護への関心を深めていくが、その学びは『指導のあり方』にも大きく左右されることを実感している。中でも、看護教員や現場の臨床指導者は学生にとっての模範となるべき存在であり、その行動が、看護職者としての必要な態度を修得するために重要な意味をもつと考える。

近年、看護学教育におけるロールモデル行動の重要性が指摘されており、ロールモデル行動に関する先行研究[1]～[7]で、「学生は看護教員の行動を観察し、看護職者として必要な態度を学習すること」が明らかにされている。また、「看護教員の看護に対する肯定的な態度が、学生の看護に対する関心を深め、学習への動機を高める要因となっていること」も明らかにされている。つまり、看護教員の行動や態度が、学生が看護職者としての必要な態度を修得するためのロールモデル行動として重要であることを示す。しかし、実際の臨床の場で看護教員と共に学生の教育に携わっている臨床指導者のロールモデル行動について言及した研究は筆者の知る限り少ない。海外においても、わが国に比べロールモデル行動という用語を多用しているものの、看護教員のロールモデル行動が中心であった[8], [9]。

そこで、本研究では、看護学実習における臨床指導者のロールモデル行動を評価し、それに影響を及ぼす因子を探索するとともに、高いロールモデル行動得点を示す臨床指導者の特性を明確にし、役割改善の基礎資料を得ることを目的とした。

II 研究方法

1. 対象と方法

看護学生の実習を受け入れている、奈良県および三重県の病院10施設に所属し、看護学実習指導に携わっている臨床指導者237名に調査票を配布し、209名から回答（回答率88.1%）を得た。そのうちロールモデル行動尺度35項目に欠損のあった15名を除く194名（有効回答率81.8%）を今回の分析対象とした。調査は2010年9月から12月に行った。

2. ロールモデル行動評価尺度

ロールモデル行動の測定には、2種類の尺度を用いた。ひとつは、舟島[10]の作成した『看護学教員ロールモデル行動自己評価尺度』である。この尺度は看護学教員がロールモデル行動を自己評価し、その結果に基づいて問題を明確化し、改善を試みるための測定ツールであり、5因子35項目で、各項目は5段階のリッカート尺度（「1. 全く行っていない」から「5. いつも行っている」）で構成されている。高得点ほどその教員の示すロールモデル行動は質が高いことを表す。この尺度の信頼性・妥当性は先行研究によって検証されている。本研究ではこの評価尺度の下位尺度35項目を用いた。

二つ目の尺度は、同じく舟島[10]の作成した「臨床看護師特性調査紙」（先行研究により内的妥当性が確認されている）に、筆者が臨床指導者特有の変数（実習受け入れ中の夜勤回数など）を付加したり、本研究に関連しないと考えられた変数（病院の所在地など）を削除して作成した調査票を用いた。

3. 用語の定義

1) 看護学実習（clinical nursing practice）

看護学実習とは、学生が既習の知識・技術を基にクライアントと相互行為を展開し、看護目標達成に向かいつつ、そこに生じた現象を教材として、看護実践能力を習得するという学習目標達成を目指す授業である[11]。

2) 看護教員（nursing faculty）

看護教員とは、看護学実習において学生の学習活動を支援する教育機関に所属し、看護師免許を所有し、教授活動を展開する教員をいう[11]。

3) 臨床指導者（clinical instructor）

臨床指導者とは、看護学実習において、看護教員と共に学生の学習活動を支援する病院所属の看護師である[11]。看護師養成所の運営に関する指導要領には、『実習指導者となることのできる者は、担当する領域について相当の学識経験を有し、かつ、原則として必要な研修を受けた者であること。』[12]と明記されている。

4) ロールモデル行動（role model behavior）

看護学生が共感し同一化を試みる看護教育者（看護教員・臨床指導者）の行動や態度であり、この行動は教育者の看護活動・教育活動の中に存在し、学生が観察可能なふるまいである[10]。

4. 分析方法

得られたデータの分析にはSPSS Ver18.0を用い、前述した35項目について因子分析（主因子法、回転法：Kaiserの正規化を伴うプロマックス法）を行った。臨床指導者の属性間の関連は χ^2 検定を行い、各因子のロールモデル行動得点と属性との関連は、属性が2群の項目の場合は独立した2群のt検定、3群以上の場合には一元配置分散分析を行い、Scheffeの基準を用いた多重比較を行った。

また、各臨床指導者の総得点（T）と総得点の平均（M）および標準偏差（SD）を用いて、 $T > M + SD$ の者を高得点者、 $M - SD < T < M + SD$ の者を中得点者、 $T < M - SD$ の者を低得点者とした。

5. 倫理的配慮

調査依頼にあたっては、説明文書にて研究の趣旨、プライバシーの保護（無記名・調査用紙は回答後に各自が個別の封筒に入れて投函する）、自由意志による調査協力であること、研究終了後のデータ破棄について説明を行い、返送をもって承諾を得られるものとした。

Ⅲ 結果

1. ロールモデル行動因子構造の決定

ロールモデル行動35項目について、天井効果¹⁾およびフロア効果²⁾の有無を確認したが、分析から除外すべき項目はなかった。次に、35項目を用いた主因子法による因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い、第7因子以降の傾きが小さいことから、6因子構造と仮定して2回目の因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量（0.4未満）を示さなかった5項目（R13, R15, R20, R33, R35）を除く30項目で再度因子分析を行なったところ、R14, R16およびR34の3項目が因子負荷量0.4未満であったため、これらを除く27項目で因子分析を行ない、最終的に表1に示す6因子構造を得た。得られた6因子に、看護教員を対象にした先行研究[10]を参考に命名をした。すなわち、第I因子は『教授活動の質を確保する行動：6項目』、第II因子は『高い社会性を示す行動：6項目』、第III因子は『誠実に対応する行動：6項目』、第IV因子は『看護を展望し続ける行動：4項目』、第V因子は『看護実践の価値を示す行動：3項目』、第VI因子は『研究に前向きに取り組む行動：2項目』である。

2. ロールモデル行動27項目の得点状況と各因子別にみたロールモデル行動得点

27項目の平均得点は3.42点であり、項目ごとの得点の上位5項目（高得点項目）および下位5項目（低得点項目）は、表2に示す通りであった。

第I因子から第VI因子の各因子のうち一番高得点を示したのは表3に示す通り第II因子『高い社会性を示す行動』（平均3.75点）であり、次いで、第V因子『看護実践の価値を示す行動』（平均3.60点）、第III因子『誠実に対応する行動』（平均3.56点）、第I因子『教授活動の質を確保する行動』（平均3.32点）、第IV因子『看護を展望し続ける行動』（平均3.19点）、第VI因子『研究に前向きに取り組む行動』（平均2.63点）の順であった。

3. ロールモデル行動因子得点と臨床指導者の特性

勤務形態別にみるとロールモデル行動得点に統計学的に有意な関係があり、表4に示すように第II因子『高い社会性を示す行動』・第III因子『誠実に対応する行動』・第V因子『看護実践の価値を示す行動』に関して、日勤のみの臨床指導者のロールモデル行動得点が二交替・三交替で夜勤をしている臨床指導者よりも高かった（ $p < 0.05$ ）。

また、日勤のみの臨床指導者のうち、実習中指導専属の人と実習中通常勤務の人とのロールモデル得点の間には、統計学的に有意な関係はみられなかった。

看護師としての経験年数とロールモデル行動得点の間には有意差はみられなかった。しかし、実習指導の経験に関してロールモデル行動得点に統計学的に有意な関係があり、表5に示すように第I因子『教授活動の質を確保する行動』・第III因子『誠実に対応する行動』・第IV因子『看護を展望し続ける行動』・第V因子『看護実践の価値を示す行動』に関して、実習の全期間に関してひとりまたは複数で実習指導をしたことのある臨床指導者のロールモデル行動得点が部分的な実習指導経験のみの臨床指導者よりも高かった（ $p < 0.01$, $p < 0.05$ ）。

学会所属の有無とロールモデル行動得点に統計学的に有意な関係があり、表6に示すように第VI因子『研究に前向きに取り組む行動』に関して、学会に所属する臨床指導者のロールモデル行動得点が学会に所属していない臨床指導者よりも高かった（ $p < 0.05$ ）。

表1 ロールモデル行動尺度のパターン行列

項 目	第I因子	第II因子	第III因子	第IV因子	第V因子	第VI因子	共通性
	教授活動の質を確保する行動	高い社会性を示す行動	誠実に対応する行動	看護を展望し続ける行動	看護実践の価値を示す行動	研究に前向きに取り組む行動	
24. 教材を効果的に活用している	0.859						0.690
23. 内容に確信を持って教授活動を展開している	0.790						0.719
22. 十分な準備をして講義・演習・実習に臨んでいる	0.746						0.697
26. 学生の反応を確認しながら授業を進めている	0.739						0.593
25. 学生が学習しやすいように環境を整えている	0.703						0.603
21. 看護技術を手際よく学生に示している	0.474						0.508
5. 明るく颯爽と振る舞っている		0.722					0.582
4. 礼儀正しく振る舞っている		0.639					0.386
1. 状況に合わせて柔軟に対応している		0.622					0.551
3. 優しさと厳しさをバランスよく保っている		0.594					0.474
6. 落ち着いた態度で行動している		0.565					0.406
2. 状況に応じたユーモアのセンスを発揮している		0.468					0.581
9. 学生の些細な質問にも答えている			0.704				0.577
7. 学生の話真剣に聴いている			0.677				0.682
10. 学生がわかるまで説明している			0.670				0.643
8. 学生のことを親身になって考え、対応している			0.633				0.732
12. 学生の要望に迅速に対応している			0.632				0.502
11. 必要に応じて授業時間外でも学生に関わっている			0.478				0.307
28. 最新の専門雑誌に目を通してしている				0.922			0.735
29. 看護に関する新しい情報に注意を向けている				0.882			0.738
27. 様々なことに興味を持ち、知識の幅を広げている				0.488			0.571
30. 学術集會に積極的に参加している				0.456			0.515
18. 看護の実例を具体的に示している					0.886		0.756
17. 看護実践の経験を生き生きと話している					0.791		0.670
19. 看護職の価値を具体的に説明している					0.717		0.648
31. 研究に前向きに取り組んでいる						0.954	0.651
32. 日々の活動の中から新たな研究課題を見出している						0.745	0.661
固有値（累積%）	37.1	46.7	54.0	59.3	64.0	67.9	

表2 ロールモデル行動下位項目の得点状況（降順）

下位項目		合計	平均値	標準偏差
高得点	7. 学生の話真剣に聴いている	780	4.02	0.83
	1. 状況に合わせて柔軟に対応している	775	3.99	0.76
	9. 学生の些細な質問にも答えている	768	3.96	0.83
	4. 礼儀正しく振る舞っている	756	3.90	0.81
	8. 学生のことを親身になって考え、対応している	746	3.85	0.88
低得点	22. 十分な準備をして講義・演習・実習に臨んでいる	586	3.02	0.90
	30. 学術集会に積極的に参加している	558	2.88	1.09
	31. 研究に前向きに取り組んでいる	511	2.63	1.02
	32. 日々の活動の中から新たな研究課題を見出している	508	2.62	0.94
	11. 必要に応じて授業時間外でも学生に関わっている	494	2.55	1.30

表3 各因子別にみたロールモデル行動得点（降順）

	合計	平均値	標準偏差
第Ⅱ因子：高い社会性を示す行動	727	3.75	0.56
第Ⅴ因子：看護実践の価値を示す行動	698	3.60	0.82
第Ⅲ因子：誠実に対応する行動	691	3.56	0.69
第Ⅰ因子：教授活動の質を確保する行動	644	3.32	0.72
第Ⅳ因子：看護を展望し続ける行動	619	3.19	0.81
第Ⅵ因子：研究に前向きに取り組む行動	510	2.63	0.92

表4 勤務形態別の各因子スコア

	日勤のみ	夜勤あり	Sig.
	(n = 63)	(n = 131)	
	平均 ± S D	平均 ± S D	
第Ⅰ因子：教授活動の質を確保する行動	20.78 ± 3.77	19.50 ± 4.49	
第Ⅱ因子：高い社会性を示す行動	23.24 ± 3.20	22.11 ± 3.41	*
第Ⅲ因子：誠実に対応する行動	22.33 ± 3.77	20.90 ± 4.26	*
第Ⅳ因子：看護を展望し続ける行動	12.86 ± 3.41	12.73 ± 3.19	
第Ⅴ因子：看護実践の価値を示す行動	11.29 ± 2.47	10.55 ± 2.41	*
第Ⅵ因子：研究に前向きに取り組む行動	5.30 ± 1.92	5.23 ± 1.81	

* p < 0.05

表5 実習指導経験別の各因子スコア

	全期間ひとり	全期間複数	部分的
	n = 59	n = 81	n = 54
	平均 ± S D	平均 ± S D	平均 ± S D
第Ⅰ因子：教授活動の質を確保する行動	21.03 ± 3.46	21.07 ± 3.45	16.94 ± 4.88
		┌─── ** ──┐	
		└───────────┘	
第Ⅱ因子：高い社会性を示す行動	23.14 ± 3.28	22.49 ± 3.45	21.74 ± 3.25
第Ⅲ因子：誠実に対応する行動	22.31 ± 3.69	22.41 ± 3.57	18.78 ± 4.39
		┌─── ** ──┐	
		└───────────┘	
第Ⅳ因子：看護を展望し続ける行動	13.22 ± 3.14	13.33 ± 3.02	11.43 ± 3.39
		┌─── ** ──┐	
		└───────────┘	
第Ⅴ因子：看護実践の価値を示す行動	11.25 ± 2.43	11.19 ± 2.21	9.69 ± 2.49
		┌─── ** ──┐	
		└───────────┘	
第Ⅵ因子：研究に前向きに取り組む行動	5.36 ± 1.71	5.47 ± 1.79	4.81 ± 2.01

* p < 0.05 ** p < 0.01

表6 学会所属有無別の各因子スコア

	所属あり	所属なし	Sig
	(n = 75)	(n = 119)	
	平均 ± S D	平均 ± S D	
第Ⅰ因子：教授活動の質を確保する行動	19.88 ± 4.38	19.93 ± 4.27	
第Ⅱ因子：高い社会性を示す行動	22.75 ± 2.88	22.31 ± 3.65	
第Ⅲ因子：誠実に対応する行動	21.47 ± 4.28	21.30 ± 4.09	
第Ⅳ因子：看護を展望し続ける行動	12.89 ± 3.47	12.69 ± 3.12	
第Ⅴ因子：看護実践の価値を示す行動	11.08 ± 2.23	10.61 ± 2.57	
第Ⅵ因子：研究に前向きに取り組む行動	5.64 ± 1.73	5.01 ± 1.88	*

* p < 0.05

IV 考察

1. 臨床指導者のロールモデル行動の特徴

27項目のロールモデル行動の高得点上位5項目のうち、〔7. 学生の話真剣に聴いている〕〔9. 学生の些細な質問にも答えている〕〔8. 学生のことを親身になって考え対応している〕の3項目は、第Ⅲ因子『誠実に対応する行動』である。2項目は第Ⅱ因子の『高い社会性を示す行動』であり、第Ⅱ因子は6項目中4項目が上位3分の1の範囲に位置していた。第Ⅱ因子の残る2項目にも低得点項目はなかった。この結果は、状況に合った行動をとったり、優しさと厳しさのバランスを保ったり、礼儀正しく落ち着いた態度で振舞ったりなどの成熟した社会性を示す臨床指導者のロールモデル行動の特徴を示した。また、学生を尊重し誠実に対応する行動は、看護専門職者としての個人の尊重や職業人としての誠実さにも関わる。指導者であること以前に看護の対象である患者への関わりのあるあり様や人としてのあり様の側面において、臨床指導者のロールモデル行動が高いことを示唆していると考えられる。

一方、ロールモデル行動低得点の下位5項目は、第Ⅵ因子『研究に前向きに取り組む行動』の〔31. 研究に前向きに取り組んでいる〕〔32. 日々の活動の中から新たな研究課題を見出している〕、第Ⅳ因子『看護を展望し続ける行動』の〔30. 学術集會に積極的に参加している〕、および、第Ⅲ因子『誠実に対応する行動』の〔11. 必要に応じて授業時間外でも学生に関わっている〕、第Ⅰ因子『教授活動の質を確保する行動』の〔22. 十分な準備をして講義・演習・実習に臨んでいる〕であったことから、臨床指導者が自分の時間を使って知識を拡大するように努めたり、研究活動に積極的に取り組むなどの看護の発展を目指す取り組みに関する消極性が伺える。特に研究活動を積極的に行うというモデルを十分学生に提示できていないことを示す。

第Ⅴ因子の『看護実践の価値を示す行動』は因子別の順位では第Ⅱ因子に次いで2番目に高く、項目数は3項目であるが、〔18. 看護の実例を具体的に示している〕〔17. 看護実践の経験を生き生きと話している〕の2項目は上位に位置していた。この結果から、臨床指導者が患者の状況に対する的確なアセスメントをしたり、手際よく看護技術を提示したりしていることが伺え、常時、臨床の場に居ることによる実践経験の豊富さから高得点項目に位置したのではないかと考える。

以上は、看護学実習における臨床指導者のロールモデル行動得点の特徴が、人としての在り方や看護実践能力の側面において高く、研究活動など職業の発展を目指す行動において低い特徴を示したといえる。質の高い看護を提供するためには、看護学研究の充実及び研究成果の活用が必要不可欠であり、研究成果を実践に活用できる看護職者を育成するためには臨床指導者の研究活動に関わるロールモデル行動の質の向上が望まれる。

2. ロールモデル行動得点と臨床指導者の特性

今回の結果は、6つの各因子におけるロールモデル行動得点と臨床指導者の属性との関連を明らかにした。以下にその関連について検討する。

まず、看護学生の実習期間に臨床指導者が日勤のみか夜勤をしているのか、また日勤のみの場合、実習受け入れ中は指導専属か通常勤務をしながらの指導かという点に関してロールモデル行動の得点をみてみた。これに関しては、学生が実習している日勤で指導に専念している臨床指導者の方がロールモデル行動得点が高いことを予測していた。やはり、実習生の指導期間に日勤のみの者のロールモデル行動の得点は夜勤も行っている臨床指導者よりも、第Ⅱ因子『高い社会性を示す行動』、第Ⅲ因子『誠実に対応する行動』および第Ⅴ因子『看護実践の価値を示す行動』で有意に高かったが、日勤のみの臨床指導者について、指導専属か通常勤務をしながらの指導かでは有意な差はみられなかった。このことから、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ因子のロールモデル行動という視点でみた場合には、必ずしも臨床指導者が指導専属でなくても日勤で学生の実習環境の中に居る安心感や、生き生きとした実践を直接行動で見せたりといったロールモデル行動が大切であることを示唆すると考えられる。

次に、看護師経験年数および実習指導の経験との関係を見てみると、看護師としての経験年数の違いには有意な差はみられなかったが、実習指導の経験別に見てみると、第Ⅰ因子『教授活動の質を確保する行動』、第Ⅲ因子『誠実に対応する行動』、第Ⅳ因子『看護を展望し続ける行動』、および第Ⅴ因子『看護実践の価値を示す行動』において、ひとりで、もしくは複数で実習全期間の指導に関わったことのある臨床指導者は、部分的

にしか関わったことのない臨床指導者に比べて有意にロールモデル行動得点が高かった。このことから、第 I・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ因子のロールモデル行動という視点でみた場合には、看護師としての経験のみならず臨床指導者としての経験が必要であり、しかもそれは部分的な関わりではなく、実習の全期間を通して指導することが必要であり、そのことがロールモデル行動の質を高めることにつながることを示唆した。

学会所属の有無との関係のみをみると、看護関係の学会に所属している臨床指導者の方が所属していない臨床指導者に比べて第Ⅵ因子『研究に前向きに取り組む行動』に関して、有意にロールモデル行動得点が高かった。これは予測していたとおりの結果であり、学会所属など研究への取り組みや研究課題を見出している姿は学生にとっての良いロールモデルとなることが示された。臨床指導者がロールモデル行動の質の向上に向けて研究課題を充実させ、その成果を看護実践や教育実践に活用できる環境づくりが不可欠であると考えられる。

今回の調査研究で上記のような示唆を得たが、本研究の限界として、奈良県および三重県の限られた地域での調査であることや、ほとんどの臨床指導者が看護専門学校の卒業生であったため、看護基礎教育課程による比較ができなかった点があげられる。

また、今回使用したスケールは、臨床指導者が自己の行動をロールモデル行動という視点から自己評価したものであるため、行動に対する認識には個人差があり、一様ではないことも理解していなければならず、今後さらに、質的な研究へと進める必要性を感じている。

V まとめ

- (1) 臨床指導者は、ロールモデル行動としての社会性を示す行動を最も高く自己評価しており、研究活動に積極的に取り組むなどの職業活動の発展を目指す取り組みに関するロールモデル行動を消極的に自己評価していた。
- (2) 臨床指導者は、ロールモデル行動の質向上のために、看護実践力のさらなる獲得・維持・向上が不可欠である。
- (3) 看護学実習を受け入れている病院は、臨床指導者のロールモデル行動の質を向上させるために、学生の看護学実習受け入れ中は臨床指導者を日勤帯での勤務とし、部分的な指導ではなく実習の全期間を通して学生に関わることができる体制づくりが望まれる。
- (4) 看護学実習を受け入れている病院は、臨床指導者のロールモデル行動の質を向上させるために、研究活動を充実させることができるような環境・体制づくりが必要である。

注

- 1) 天井効果とは (平均値 + 1SD > 6)
- 2) フロア効果とは (平均値 - 1SD < 1)

※項目得点に天井効果やフロア効果が懸念される場合には、懸念される項目の分布を確認（各得点の人数をチェック）し、さらに項目内要を考慮して削除するか否かを決定する。

文献

- [1] Rauen, K.C. : The Clinical instructor as role model, *Journal of Nursing Education*, 33-40, 1974.
- [2] Dotan, M. et al. : Role Models in nursing, *NURSING TIMES FEBRUARY*, 12, 55-57, 1986.
- [3] 笠井勝代 他 : 臨床実習における「やる気」の要因分析, 第26回日本看護学会集録—看護教育—, 78-81, 1995.
- [4] 舟島なをみ 他 : 看護学教員のロールモデル行動に関する研究—教員の特性と教員自身が評価したロールモデル行動の質との関係—, *千葉大学看護学部紀要*, 25, 17-25, 2001.
- [5] 亀岡智美 他 : 看護専門学校に所属する教員の役割遂行の現状, *日本看護学教育学会誌*, 10(2), 195, 2000.

- [6] 中谷啓子：学生が知覚している看護学教員のロールモデル行動に関する研究，看護教育学研究，9(2)，2000.
- [7] 松田安弘 他：看護学教員のロールモデル行動に関する研究，千葉看護学会会誌，6(2)，1-8，2000.
- [8] R.N.Beth Perry：Role modeling excellence in clinical nursing practice, Nurse Education in Practice, 9, 36-44, 2009.
- [9] Wiseman,R.F.：Role Model Behaviors in the Clinical Setting, Journal of Nursing Education, 33(9), 405-409, 1994.
- [10] 舟島なをみ：看護教育学研究—発見・創造・証明の過程，医学書院，2007.
- [11] 杉森みどり 他：看護教育学 第4版，医学書院，2009.
- [12] 看護行政研究会：看護六法 平成23年版，新日本法規，2011.

Study of the Role by Clinical Instructors during Clinical Nursing Practice

TAKATSUKA Yukari^{*}, NAGAI Yumiko^{**} and YAMAKAWA Masanobu^{**}

^{*} *Heartland Shigisan Nurse College, Graduate School of Health Science*

^{**} *Department of Health & Life Science, Osaka Kyoiku University*

The objectives of this study were to evaluate role model behavior by clinical instructors during clinical nursing practice, investigate factors that affect this, and identify the attributes of clinical instructors who scored highly for role model behavior, in order to obtain basic resources for improving role model behavior. Questionnaires were distributed to 237 clinical instructors involved in practical instruction at hospitals accepting nursing students for clinical practice, and responses were obtained from 209 (88.1% response rate). After the exclusion of 15 respondents who were missing one or more items on the role model behavior scale, the responses from 194 clinical instructors were analyzed (81.8% valid response rate).

We found that clinical instructors who scored highly on role model behavior during clinical nursing practice characteristically also scored highly in terms of personal qualities and practical nursing skills, and poorly on research activities and other behavior with the aim of professional development. With respect to the association with the attributes of clinical instructors, those who only worked during the day scored more highly than those who worked night shifts, and those with experience of involvement in instruction throughout the entire period of clinical practice scored more highly than those who only had experience of partial involvement. This suggested that while students are undergoing clinical nursing practice, a framework should be created in which clinical instructors can work on day shifts and engage with students for the entire duration of the clinical practice.

Key Words: clinical nursing practice, clinical instructor, role model behavior

